

## 20240507 地域の農家との連携から！農作物の高温障害について

先月25日に、新しい栄養士の先生と3年の担任の先生とで、給食の食材提供農家でもある、梅室農園と川里農園にご挨拶に伺いました。

昨年度、3年生はまち探検で梅室農園を訪れた際に、規格外の野菜と出合いました。少し形が悪かったり、大きさが不揃いであったりするだけで出荷できず、結局捨てられることになる野菜がこの世にある現実を、こどもたちは初めて知ったわけです。味も栄養も変わらないのに捨てるなんてもったいない！しかし、それが現実で、その現実はこちら



だけでなく日本各地で「あたり前」にこれまで行われてきて、今も日々行われているという事実をこどもたちは知ります。

さらに、そうした食べられるのに捨てられてしまう「フードロス」は、日本の国で出るものだけで、世界の飢餓を救うことができるだけの凄まじい量であることも学びました。

「自分たちにできるところから、このフードロスを止められないか」この深い問題意識が、さらにこどもたちの学びと活動を引き出し、広がっていききました。

こどもの学びに火をつける問題意識の耕しが、SDGsの学びの大きなポイントです。

今年も、3年生の社会科は、自分たちの住んでいるまちを知るところから学習をスタートしていきます。持続可能な社会を創っていく上で、このフードロスの問題は、実に私たちの生活そのものと直結しています。フードロスはどこか遠くの話でなく、日々私たちが生きている生きざまそのものから生じている問題とも言えます。この学びのスタートを毎日の給食食材をご提供くださっている地元農家さんと連携して実感的にすすめられるのはとても理想的な教育環境とも言えます。

そんな、これからの指導の見通しを持って、ご協力を今年もお願いしたく、3年生の先生方にご挨拶に伺ったわけです。当然テーマは「食とフードロス」です。しかし、実際にお会いしお話を伺うと、別の問題も見えてきました。それは、「野菜の高温障害」です。

「野菜の高温障害」は、気温の急上昇で農作物が被害を受け、生育不良を起こす現象です。昨年夏、川里農園では、トマトがだめだったと伺いました。同様な被害は、小平市内の農家でも確認されています。昨年は、10月になっても夏日が続きました。秋になっても気温が下がらず、まいた種が土の中で腐った

り熱過ぎて発芽しなかったりという被害も全国で確認されています。報道の中で、被害に遭った農家は、こんなのは生まれて初めてだと嘆いていました。高温障害になりやすいといわれている農産物の代表が私たちの主食である「稲」です。昨年度は収穫量として不作と言われることはありませんでした。しかし、その内容は悲惨なもので、1等米の比率は、59.6%（農林水産省 2023.10.31）で、過去最低となりました。水不足で全滅も危惧された新潟県は、13.5%で、前年度比マイナス60.9ポイントでした。米の等質は、農家の収入に直結します。

昨年10月頃のトマトなどの野菜の値段高騰を覚えていらっしゃるでしょうか。ほぼ倍近くに値上がりしました。これも高温障害による減収が大きな原因の一つです。

果実についても同様です。

また、水産業も海水温の高温化によってこれまでの常識や方法が通用しなくなってきています。しかし、今の指導の内容では、気候危機によって「これまでが通用せず行き詰ってしまっている現実」には触れられていません。

気候危機こそ現実に農家・漁師を苦しめていて、それは私たちの生活に直結しています。今現実に起きていることをしっかり教え、現実を見つめ、今を賢く生きようとする態度を養ってこそその教科指導ではないでしょうか。

暑さに強い品種改良の研究も大切だと思います。しかし、そうした「対応型」の発想だけでなく、危機そのものにメスを大胆に入れていくことが大切だと考えます。

そして、こどもたちには、

- ・まず「起きていること」をできる限り現場の声から正しく知り、冷静に捉えること。
- ・より深い問題意識をこども自身もつこと
- ・「その原因と原因を取り除くためにできること」をこどもが主体的に追究すること。
- ・安直な絶望感や、根拠のない楽観主義でなく、実際に行動している人の姿から「希望」を見出す触発的な出会いを通し自らの生き方を考えること。
- ・できるところから実際に行動し、その輪を広げていくこと。

が大切だと思います。

もちろん、その学びには段階があります。この学びをスパイラルに重ねていくことが大切だと思います。学校だけではもちろん不十分です。家庭や地域、行政との連携も大切です。皆が本気にならないと、もう間に合わないかもしれないところまできているように思います。